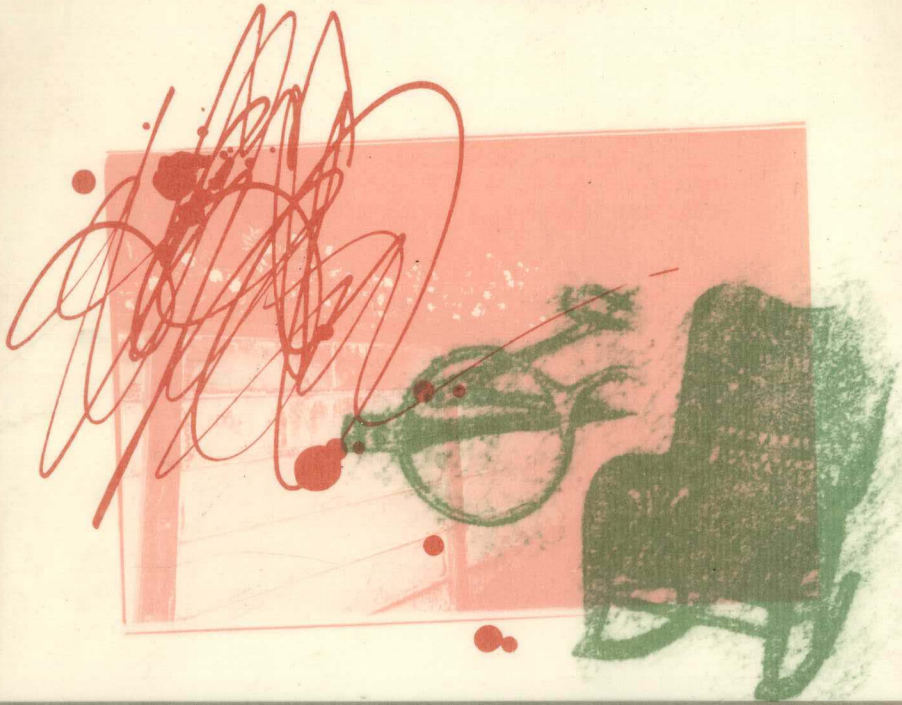
袋小路の休日

小林信彦



高度成長のひずみに漂う人間、挫折したタレント・老残の編集者・不遇な映画監督等を浮彫して、現代の異相を時と空間の中に定着する野心作

中央公論社　0093－001343－4622　980

袋小路の休日

小林信彦

中央公論社

袋小路の休日　検印廃止
©一九八〇
定価九八〇円
昭和五十五年一月十五日印刷
昭和五十五年一月二十五日発行
著者　小林信彦
発行者　高梨茂
印刷　三晃印刷
発行所　中央公論社
〒104東京都中央区京橋二ノ八ノ七
電話（五六一）五九二一
振替東京二－三四

袋小路の休日　目次

隅の老人 7
北の青年 49
根岸映画村 91
路面電車 137

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

自由業者 167
ホテル・ピカディリー 211
街 247
あとがき 281

装幀　平野甲賀

袋小路の休日

隅の老人

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

斬新な企画で知られたPR誌の編集長を辞した男を激励する会が、十二社の台湾料理屋の二階でおこなわれたのは九月の半ばだった。スポンサー側の要望と合わぬための解任という噂があるせいか、励ます側のスピーチはいずれも歯切れが悪く、会の空気は沈みがちであった。

宏はそのまま家に帰る気にならなかった。狭い階段を降りるときにいっしょになった高野に、どこかに寄って行きませんか、と声をかけた。

「少しだけなら……」

新聞社系週刊誌のデスクである高野は、社に戻らねばならぬ様子であった。

「この辺は、何もないですねえ」

「新宿の方に歩けば、知っているスナックがあります。芝居の連中が集る店ですが、十時まえは空いているはずです」

「そこにしましょう」
高野は頷いた。
かつて詩を書いていたこともある高野は、新聞社で働いているとは見えぬほど物静かで、感情をあらわにしない男だった。宏に会うと、外国文学の新しい傾向とか、むかし仲間だった詩人たちの噂を口にするだけだが、社内では遣手で通っているらしかった。
「高野さんにうかがいたいと、まえから思っていたのですがね」
中央公園に向う歩道を歩きながら宏は、きり出した。
「仕事ができる男に限って、社内的立場が悪くなったり、やめたりする羽目になるのは、どういうことでしょうか？」
「そうですねえ……」
高野は俯きかげんで言った。
若いころ、雑誌の編集に携っていて、不明朗な形で職を放棄せざるをえなくなった宏は、ふつうの物書きが、編集者の異動や退社を耳にするのとは、やや異った受け止め方をするようであった。そうした感情移入は不必要とわかっていても、やめた者がこれからどうするのだろうという懸念をふり払うのが、むずかしかった。
「あなた自身の場合を考えたら、どうですか？　上村宏氏に何が起ったか？」
週刊誌の見出しの調子でそう言って、高野はかすかに笑った。

「ぼくは、サラリーマンとしては失格と、初めから考えていましたから」
「しかし、会社の態度は冷めたくはなかったでしょう」
「雑誌が軌道に乗るまでは、ぼくはなりふり構わずって感じでした。会社も、かなりの無理をきいてくれましたよ」
「でしょう」と、高野は予期したように答えた。「で、ある日、まわりの態度が変った……」
「ぼくの場合は特殊ですから」
宏は、一般論にずらそうとした。
「高野さんにうかがいたいと思ったのは、あなたが、鋭い才能と組織の中での地位を両立させているまれな例だからです」
「わたしも、そろそろ危いですよ」
冗談めかした答えが返ってきた。
「その問題は、むずかしいのでね。例の〈組織と個人〉といった図式では解けやしませんよ」
「どういうわけでしょうか」と宏はなおもこだわった。「才能のある奴ってのは、どのみち、ひとくせも、ふたくせもあるに違いないのです。少くとも、円満な人柄ではないでしょう。しかし、それを自由に泳がせておけないほど組織ってものは狭量なんですかね。それとも、才能の輝きを恐れるのでしょうか」
ややあって、高野はわらうように答えた。

「どんな才能であろうとも、そんなものを恐れるほど、組織は弱くはありませんよ」
会話が跡切れた。高野の答えには論拠があるようだが、それ以上は語りたくなさそうだった。
旅館のネオンで明るくなっている横町を入ると、左側にスナックの看板が出ていた。小さなビルの二階にあって、通りに向って取り付けられた換気扇が煙を噴き出している。
「食べる物がありますかね」
高野は階段を登りながらたずねた。
「遅れて駈けつけたもので、殆ど料理を食べていないのです」
「特製ラーメンてやつがあります。このごろ、めったにない、ちりちりした麺が入っている……」
「安心しました」
宏は先に立って黒塗りのドアを押した。店内は外見から想像するよりは広く、汚れた絨緞の上に椅子と卓子が並べられていて、突き当りにカウンターがある。客は、一組の若い男女がいるだけだった。
「どこにしますか?」
カウンターに向って歩きかける高野に、宏は、はじの方が……、と言った。見ず知らずの人間が集る場所に足を踏み入れると、なにかしら危険を感じるたちの彼は、片隅の椅子に腰をおろし、落ちつくために煙草をポケットから出した。
とりあえずビールを注文した高野は、壁から天井まで貼りめぐらされた大小さまざまのポスタ

ーを珍しそうに眺めた。いわゆる小劇団のものばかりだが、ジェームズ・ディーンとプレスリーの写真が混っていた。

「お彼岸が近いのに、いつまでも蒸しますな」

高野はタオルで顔をこするようにして、

「こんなことでもないと、お互いに、顔を合せられなくなって……」

「本当ですねえ」

かつては、のべつ、会っていたものだ、と宏は想い起した。ハリー・ベラフォンテが初めて来日したとき、高野は週刊誌記者の特権を用いて、褐色の肌の歌手のリハーサル風景を宏に見せてくれたのであった。

「編集者意識ってのは、十何年経っても抜けないものですかねえ」

高野はひとりごとのように言った。

「さあ、どうでしょうか。……ぼくの場合は、細々と雑文業を続けてきて、もう先も見えているから、よけいに同時代の戦友たちのことを考えるのかも知れない」

「戦友、か。そういう感じですか」

「死屍累々ですよ」

宏は枝豆をつまんだ。

「とくに応えたのは、菊島さんが亡くなった時だな。菊島さんがSFの雑誌を創刊した年に、ぼ

くも新雑誌を創刊したんです。……菊島さんがいなかったら、日本のSFの隆盛はなかったと思うのですが、亡くなるまえは不遇でしたからね。無念だったでしょう」
「菊島さんも、癖のある編集長だったな」
「いろいろ批判はあるし、ぼくだって、そんなことはわかっているんだけど、癖のない男が、それまで日本になかったジャンルの雑誌を定着させられますか。プラス、マイナスを秤にかけて、プラスの方に針が傾けば、立派なものですよ」
宏の語調は憤りに近くなった。
「つまり、推理小説の歴史でいえば、博文館の森下雨村にあたるわけだな」と、高野は明快に断定した。「推理小説がこれだけ盛んになっても、生みの親の森下雨村の名を記憶するのは、われわれどまりですからね」
「そうでしょうねえ」
「そうだ、あの方はどうしました?……博文館で鳴らしたという老人……」
「狩野さんですか」
狩野道平の名は宏の記憶から離れることがなかった。茶色いベレー帽をかぶり、唇を突き出すようにして足早に歩く小柄な姿を昨日のことのように覚えていた。
「そういえば、高野さんは、うちの社に見えて、狩野老人のインタビューをしたことがありましたね」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com